

気づいていますか？子どものSOSを

理想は『いじめを克服する力を身につけさせること』。しかし、小さな子どもにそれを望むことは酷であり、周りの友達や大人の力が必要となる。いじめによる死など、悲しすぎる事態を避けるために、大人はどうあるべきかを考える。

1. START（学校問題緊急対応チーム）とは（※田中学校相談員はSTARTに在籍）

【スクール トラブル アクシデント レスキュー チーム】

○教育委員会指導室内にある組織で、主に電話による相談や苦情を受け、学校と連携して早期に解決を図る機関

○平日の午前9時から午後5時まで受付〔TEL3579-2664〕

○板橋区の小・中学校の退職校長からなる4名チーム

＜主な相談内容＞

- ・保護者等からのいじめ、不登校、学習面などの相談
- ・保護者等からの学校や担任などへの苦情
- ・学校からの事件・事故の報告、緊急な対応への相談 など

＜相談件数＞

- ・平成24年度……1100件
- ・平成25年度……1189件（1月末現在） ※内、いじめに関する相談は91件

2. 講演者の前歴

○小学校は志村第二小学校、中学校は志村第一中学校を卒業。

○文京区で教師になり、北区、板橋区立の小学校で、教諭、教頭、校長を経験。

（【教諭】高島第四小 【教頭】中台小 【校長】桜川小、弥生小、若葉小、板十小、成増ヶ丘小）

3. いじめの体験

○教諭時代、6年生を担当していた時に、私自身が児童からのいじめを経験

【きっかけ】女子児童7人組の中で、一人の子がトイレの個室で放課後水をかけられていたのを助けたつもりが、私自身がいじめの対象に。

【いじめ行動】先生と呼ばない、名前を呼ばれても返事をしない、傍に来たらわざとらしくよける。

○40名の学級で、男の子や他の女子とはよい関係にあったが、その7人の存在が非常に大きく感じられ、毎日が苦痛だった。プライドがあり誰にも相談できなかった。最初は高圧的に従わせようとしたがうまくいかなかった。

○徹底的やさしさ作戦に方針を転換⇒半年後、その子が「先生、あっ言っちゃった。いいやもう」と普通に話しかけてくれたことから関係が修復された。※子どもたちもきっかけを探していた

◎私の信念…『小学生に悪いことをしてしまう子はいるが、悪い子はいない。』

- ・悪い子というレッテルを自分の中で張ってしまったら、何とかしようという気持ちがあきらめへと変わってしまう。
- ・レッテルを貼られたらよくなるとうとする気持ちは薄れてしまう。
- ・教職生活38年、悪い子には一人も出会っていない。

4. いじめの定義

《いじめ防止対策推進法》（25年6月成立）

「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人間関係にある他の児童等が行う、心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」

◎要は、被害にあっている子が、肉体的な苦痛や精神的に嫌な思いを感じる行為を「いじめ」という。
加害者側の理由は問題にしていないうこと。

5. いじめの態様

○冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、陰口など嫌なことを言われる

- ・デブ、ちび、ババア、バカ、アホ、クズ、うざい、使えねえ、消えろ、死ね などの暴言
- ・傷つくような内容の手紙を回される⇒中学校ではインターネット（LINEなど）

○仲間はずれ、集団による無視（シカト）をされる。

- ・LINEで返信が遅れたりすると「使えねえ」、返信しないと「死んだ」になる。
⇒授業中でもスマートフォンを手離せない子がいる。

○わざとぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり蹴られたりする。

○金品をたかられる。

○持ち物を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。

○嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。

○パソコンや携帯電話、スマートフォン等で、誹謗中傷や嫌なことをされる。（LINE等）

- ・文字によるメッセージは会話と違って、相手の感情などが分かりにくく、誤解を招きやすい。
- ・スマートフォンは写真合成もできる。それをLINEで送るなど。

◎平成25年2月の都教委調査結果（都内公立学校の9300人が対象）

- ・いじめられた経験がある……66%
- ・誰にも相談しなかった……45%

【理由】
・被害が悪化するから……75%
・誰かに言っても解決しないから……56%

◎いじめが増えるのは、小5、中1、高1が多いといわれている。

⇒相談先としては、保護者、友達、先生の順。

◎平成25年12月の文科省の調査で、国公立の小中高校でいじめが把握された件数

- ・平成24年度……70,200件
 - ・平成25年度……198,000件
- 2.8倍

※岩手、宮城、福島では、前年度比較で4～6倍に増えている。

⇒いじめとストレスの関係が読み取れる。ストレスが多くなるといじめは増える。

◆コミュニケーションテクニック『伝聞の力』

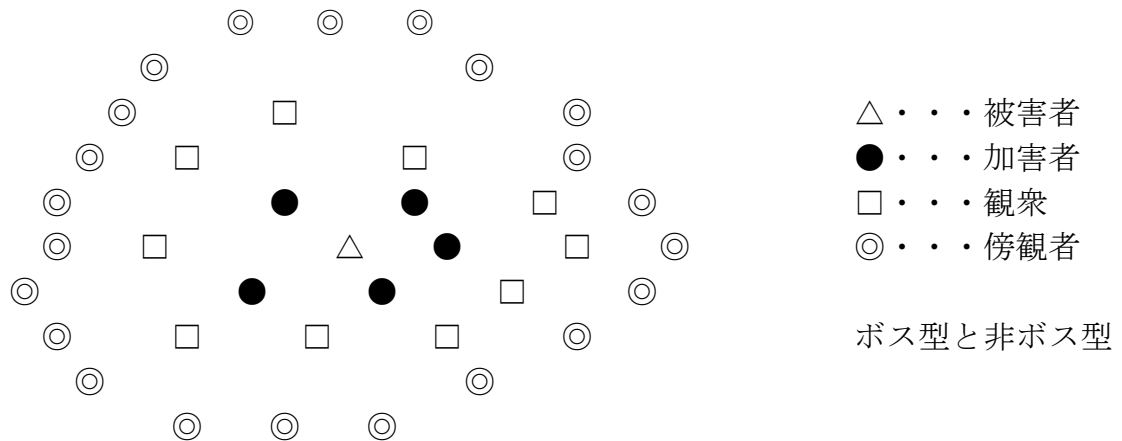
例)「パパがね、最近ママの料理一段と美味しくなったなって言ってたよ」

⇒直接言われると「何か怪しいぞ」と疑うかも。伝聞として伝わると素直に聞くことができる。

♪兄弟がいる場合は下の子からの伝聞により褒めるなど、テクニックを活用してみるのもいいかも。

「お兄ちゃん、勉強頑張ったから2学期の成績がグンと上がったよ。すごいね、お兄ちゃん。」

6. いじめの構造



◎「うちの子はいじめられていないだろうか」と心配しがちだが、圧倒的にいじめている方の人数が多いことに注目。被害者は1人（2人以上だったらいじめられない）であるのに対し、加害者は必ず複数。仲間を引き込み「俺だけじゃないんだ」と自己の行為を正当化しようとする。

△被害者……次々に代わる場合もある。

●加害者……ボス型と非ボス型がある。ボスは直接手を下さない場合が多い。

□観衆……直接手は下さないが、面白がって見ている。

◎傍観者……何も知らないが、暗黙の了解を与えている。

◎被害者から見ると、加害者、観衆、傍観者の全員が加害者である。

⇒つまり、学級や部活、塾やスポーツクラブなどの集団で、いじめが発生した時は、「全員が関係者なんだ」という認識が必要。「私はやっていないから関係ない」は通用しない。

○被害者は、家族や先生になかなか相談しない。自分の弱さを恥じる気持ちがある（⇒自殺してしまう子の心理）。

○被害者が加害者になると怖い（どうされると一番嫌かを知っている）。

◎私の考え……『いじめ以外で自殺する子どもはいない。』

高学年の子を担当した時には「いじめはかっこ悪いからやめろ」「かっこいいのは、何気なく助けてあげることだよ」と言っていた。子どもたちに行動目標を示してあげることが大事。

7. いじめ防止と家庭の役割

1) いじめを生まない土壌づくり

○明るく何でも話せる雰囲気作り、笑いが多い家族

○いじめの背景にはストレスがある。ストレスをため込まないような環境づくり

×やりたくない習い事、親の過剰な期待

○普段から、いじめは絶対にいけない行為だと印象付ける会話

○兄弟姉妹を公平に扱う。兄弟げんかの時に「お兄ちゃんだから我慢しなさい」では、下の子に対する優しさは生まれない。

※私は、学校で子ども同士のけんかがあった時には、「どちらかが全部正しくて、どちらかが全部悪いということはないだよ。相手の悪いところを言いつつではなくて、自分が悪かったと思うところだけ謝ったら。」とっていた。

子どもは「う～ん」と考えて、A「最初に悪口を言ってごめん」⇒B「僕も叩いてしまっでごめん」⇒私「そうか、じゃあ握手だ。よし遊んで来い」となる。

○叱ることの多い親に、子どもは心を開かない。

○普段から子どもの言葉をよく聞いてあげることが大事。不満がたまると悪い言葉を発するようになる。

「お母さん（お父さん）、その言葉嫌いだな」と悲しげに言い、それ以上何も言わなくてよい。

⇒「こういう言葉を使うと親を悲しませるし、構ってもらえない」ということを学ぶ。

2) 心の通う対人関係

○いじめの起こらないクラスは、とにかく明るく、失敗も責めない。助け合う。

担任と子どもたちの信頼関係が確立している。

○家族一人一人のよいところを認め合う会話、失敗してもすぐに許しあえる雰囲気

○日ごろから人や家族に感謝する言葉を意識して使う。

※親の電話を子どもはよく聞いている（担任や他の親、姑の悪口等）。

3) 社会性のある大人への育み

○社会のマナーをその都度教える。できれば理由も伝える。

○学校は社会への教習所。学校のきまりも大事に守らせる。

◎私は、人を傷つけて平気な小学生に出会ったことがない。その子自身が大きく傷つき、ストレスの塊となっている子には、たくさん出会ってきた。どうしてそうになってしまうのだろうか？

◆ある学校で6年生の優等生男子が担任の女の先生を殴ったことがあった。

⇒そのことを母親に伝えると、「殴らせるようなことをしたからです。うちの子は悪くない。」とのこと。

⇒その子は中学生になって母親に暴力をふるうようになった。

言い分は「殴らせるような嫌なことを言ったからだ。」

8. いじめの早期発見・早期対応

1) いじめに関するチェックカード

最近目立つ様子について、当てはまる…○、当てはまらない…×を

1. 学校でのことを全然話さなくなった。逆に突然いっぱい話すようになった ()
2. ある特定の子の悪口をよく言うようになった ()
3. 文房具等の持ち物がよくなる ()
4. 自分の物でない物を持って帰ってくる ()
5. 食欲がない様子が見られる ()
6. 物思いにふける(考え事をしている)様子が増えた ()
7. 休みの日や学校から帰ってから、外に遊びに行かなくなった ()
8. 自分の持ち物の片づけができない、物を乱雑に扱う(大事にしない) ()
9. 朝、頭が痛い、お腹が痛いと言って、学校に行きたがらない ()
10. 短気になって、母に反抗したり、物に当たったりするようになった ()

◆このほかにも、「メールが来ても親の前で見なくなり、電話にも出ない」「朝、トイレに入るとなかなか出てこない」「成績が急に下がった」「体に親が知らないアザや傷があった」などの兆候に気をつける。

◎3つ以上○がいたら、明日すぐに担任の先生に相談を。
STARTでも相談を受付 ⇒TEL3579-2664

2) いじめ調査

○板橋区教育委員会では、「いじめはどの子にも、どの学校でも起こりうるものである。」という認識に立ち、『いじめ0を目指す』ではなく『いじめ見逃し0』を目標に掲げて学校を指導している。

○毎学期「いじめに関する調査」を、子ども向け、教師向けに行い、早期発見に努めている。

⇒高学年や中学生はなかなか「自分はいじめられている」とは書けないが、傍観者の子から「あまりにもひどい」との情報が出て、いじめを発見できることもあるので有効。

⇒教師も、油断することなく、日ごろから「いじめは起こりうる」という気持ちで子どもたちの様子を見ることができるようになる。

○平成25年7月の国立教育政策研究所のいじめ追跡調査によると、小4から中2までの6年間で、

- ・被害経験を全く持たなかった子……1割
 - ・加害経験を全く持たなかった子……1割
- ⇒つまり、入れ替わり経験している。

3) 教師の悪い癖

○私の経験からも言えることだが、教師には邪魔なプライドがあって、「自分のクラスからいじめが発生するのは恥ずかしい」「何とか、他に知られないうちに自分で解決しよう」と焦る。

今のいじめは一人では解決できない。組織で真剣に取り組む必要がある。

4) 保護者に願う

○子ども同士のトラブルで、物隠しや中傷といったいじめの事件が発生した場合、学校では、一人ひとりから話をよく聞いて、教師が間に入って仲直りなどの解決を図っている。

しかし、興奮した親御さんが「絶対許せない、登校させない」などのため、不登校になる事例がかなり多くある。私は、「お子さんの気持ちはどうなのですか？」と聞くようにしている。

○子どもの様子がおかしい、という変化に気付いた時には、すぐに担任や相談しやすい学校職員に相談していただきたい。何事もなかったらそれでよい。

○親が「あの子と遊んじゃダメ」と言う場合がある。⇒子どもは親公認でいじめをする。

○「わが子を守る」という意識は大事。だからと言って、ずっと大人になるまで守ることはできない。

加害者や学校を責めるより、今いるわが子を強い子に育てようと思うかどうかが大事。

そのために、親が背中に隠してしまうのではなく、少し背中を押してあげることが必要。

○父親に多い「やられたらやり返せ」⇒いじめの連鎖を呼ぶ。やり返せない子は、どうしたらよいかまた悩む。

◆私が「いい子に育てているな」と感心した例

板橋区の6年生女子がクラスの子たちから言葉による暴力を受け、父親は「言い返したら」と言った。

⇒少女は、「言っている子はそういう子だと思っているから言われても無視している。他に友達がいるから大丈夫だよ」と言った。

5) 学校と家庭の連携

○連携は信頼関係なくしてできないが、初めから信頼関係など築けるものではない。

できる範囲で学校の教師、校長、副校長と日ごろから会話ができる関係を努めて作っていただくことが何かあった時の連携につながる（例：学校行事に参加、保護者会に参加、委員を引き受けるなど）

⇒このことは保護者同士の間でも言えること。

○相談として「学校への不満、不信」が多く寄せられるが、情報源がわが子からだけという例が多い。

『子どもは自分に都合の悪いことは親には話さない』ので、とにかく学校（担任、校長、副校長など）とよく話し合ってみていただきたい。

○小学校と中学校との連携がうまくとれた例

中1男子が、登校時に下を向いてとぼとぼ歩いていたのを、小学校（卒業校）の校長（私）が発見

⇒私「〇〇君、いじめに合っているのか」 ⇒否定しない

⇒進学した中学校の副校長へ連絡 ⇒次の朝、友達と二人でにこやかに登校

※普段から学校同士で交流をもっていたことが功を奏した。

最後に

◎いじめは、『人間本来潜在的にあるもの』と考える。

自分と違う異端を排斥する心理、持っている者に対する嫉妬、生活環境のストレスなど、形は様々だが、どの子にも、大人の中にもあるもの。

それが何らかの形で表れてきたものが「いじめ」であり、いつどこで出るかわからず、全くなくすることはできないもの。

出てしまわないように、『教育（学校教育、家庭教育）』という力で予防すること。

出た時には多くの良心的力で平常に戻すことが大切。